

## 生産者を支えるための 製品・サービスを展開

(株)第一測範製作所  
代表取締役社長

木村 敬知氏(50歳)に聞く



### ▷ 会社の概要を教えてください

当社は1944年に新潟県小千谷市で、ゲージメーカー「小千谷航空精機」として創業しました。ゲージとは穴や軸、ねじ加工をした部品を品質確認するために扱う検査工具や治具のことです。

事業が広がるきっかけは二つありました。まず一つは、1976年に技術提携した空気マイクロメーター。この技術により加工した部品が実際にどのくらいの寸法で仕上がったかを確認でき、品質の安定化や情報化が進んだこと、さらには測定の実自動化に結びつきました。

もう一つは、1979年の精密ボールねじ。背景には世の中で省力化と数値制御(NC)化のニーズがあり、ねじゲージの生産で得た技術を応用してボールねじ事業を始めました。

### ▷ ボールねじ事業について教えてください

トライボロジーについて創業当初から社内の精密な加工を通じて関わりを感じていましたが、ボールねじ製品を手掛けることで視点が変わりました。

ボールねじの製品開発は、顧客の要望に応えるため、生産性を向上したいという要望があった際にはハイリードでコンパクトなボールねじを開発し、また保守作業の省力化を求められた際

には、ボールねじ用の潤滑補助装置「OSユニット」でメンテナンスフリー化に応えました。加えて、この製品は潤滑剤の使用量を抑えて環境に配慮したことが利点となりました。

ボールねじ事業だけに限ったことではありませんが、当社の特徴は“精密であること”です。ボールねじと送りねじ製品は精度を高めるためにゲージや測定機器で培ったラップ作業(研磨作業)を、丹精込めて人の手によって仕上げています。

### ▷ 今後の目標は？

当社は、時代のニーズに合わせ、顧客に向け、そして社内に向けて製品開発をしてきました。例えば、空気マイクロメーターでは、ビデオデッキの磁気ヘッドの寸法測定に採用され、高精度の部品加工に貢献しました。空気マイクロメーターの設定に用いるマスターリングでは、ラップ作業で寸法を仕上げます。かつて、はめ合い検査をするために基範のプラグゲージを多く用意しなければなりませんでしたが、小径内径測定機「IDM」は、その手間をなくして作業時間を短くするために生まれました。

当社の加工ではラップ作業をはじめ人の手を必要とする作業が多く、職人がいます。労働人口の減少が周知です

が、地方はそれがより顕著だと感じています。だからこそ今後はロボットなどを活用して働く人が作業しやすいように支援していくことが求められます。

顧客に対しては、位置決めテーブルや多関節ロボットを活用して、様々な穴や軸、ねじ加工をはじめ、傷や顔料の混練度を検査するシステムを提案しています。どのような作業が自動化でき、働く人の支えになり得るのか、製品やサービスを展開していくために社内の取組みから応用していきたいと考えています。

私は“足るを知る”という言葉が好きです。というのも老子道徳経の三十三章にある「知足者富」のくだりに感銘を受けました。“努力を続ける人間はそれだけですでに目的を果たしていて、自分本来のあり方を忘れないのが長続きするコツである”という意味の言葉が続いています。

足るを知るという言葉は、諦めるというニュアンスで受け取られがちですが、目標に向かっての取組み方が大事で、ルーツや自分自身を理解し、道に沿って進めば長続きすると説かれているのです。

だからこそ、仕事を進めていく上で自らと向き合い、どう実践していくのかをいつも見つめ直しながら、周囲と協力し合って挑戦を続けていきます。